



商業実践の様子（大正12年度卒業アルバムより）

であるが、彼は、商品学の一般的な教育の必要性を当時の事情と関連させてつぎのように述べている。

「一般家庭にありては、商品の直接消費者としての必要上商品鑑定に関する知識は文化生活に於ける一つの高等常識と断言するに憚らざるなり、余は家庭にありて直接商品購入の衝に当たる主婦たる人々に向い、この知識の普及を鼓吹せんと欲するものにして、女子教育の一教科に商品学の応用に関する一項目を設置する甚だ緊要なることなりと思為する。」

要約すると、（商人などはもちろん）消費者の立場としても商品（鑑定）に関する知識は必要であると断言でき、また、彼は消費者教育の充実や学校教育への導入が必要だと強く考えているのである。

今も生きる実学の精神

時代とともにキャンパスは変化しても、高商時代からの伝統は、教育と研究の中に依然として引き継がれている。商品学についていえば、斉藤要教授（在職：昭和37年 昭和61年）の退職とともに、自然科学的方法からの直接の継承は絶えたのであるが、しかし、喜ばしいことに、現在、片岡正光教授の研究指導の下に、高商石鯨の試作が試みられているとのことである。成功すれば、往時と同じ製品が再び入手できて、実際に使用できるかもしれない。

自然科学系の商品学は、研究の規模と専門分野の細分化と測定技術の高度化によって、文科系大学では維持できなくなっているのであるが、一方の社会科学的アプローチによる商品学の系譜は、商学科商学講座の授業科目である「流通システム論」、「マーケティング」、「貿易論」などの学科目として、学生の人気科目となっている。また、新しいビジネスのシーズを育て、ビジネスとして確立させようとする「小樽商科大学ビジネス創造センター」や、学生達による新しいビジネスのアイデアを募る「ビジネスアイデアコンテスト」、さらには、ビジネススクールの設置などは、本学の実学精神を受け継いだシステムや活動と言える。

参考文献：斉藤要「日本における自然科学的商品学の黎明期」
日本商品学会・北海道部会設立20周年記念史



高商石鯨実習風景
（大正12年度卒業アルバムより）



企業実践工場外観
（大正12年度卒業アルバムより）

高商石鯨 に関する記述

大久保鹿弐、「高商石鯨売り歩きの記事」『緑丘五十年史』

大正十一年十二月の事だったと思うが冬休みの二週間を無為に過すには残念と言うので、友人の若菜と語って、販売部の伊藤先生に石鯨を二十箱（一箱は三コ入五十個）即ち三千個を仕入れて、之を札幌と岩見沢へ送って石鯨行商をした事がある。販売部で借りて来たのであるから一銭の資本も要らない。見物を兼ね、実践行と言うところだ。其の時分にこんな事をする学生は外になかったのか、大変な人気で札幌の如きはどこへ行っても大歓迎を受け、石鯨を買ってくれた上に御馳走してくれると言う歓待振りて十箱は二日位で売りつくし、岩見沢では一日に三箱売り切って、あとは同窓のA君に譲って帰った事がある。此の時の純益金は、二十七円五十銭也、一人前十三円七十五銭だ。優に一月の食費に該当したと言う大儲けをした想い出が浮かんで来た。

伊藤整著『若い詩人の肖像 - 海の見える町』

半ば工業学校的な所のあるこの学校は、その外に、石鯨工場を持っていて、それもこの官舎の近くにあった。…校舎の一番裏側にある別な建物に入る。そこには化学実験室や階段教室などがあり、また、この実業高校で教える工業的な特殊科目に関係する教師たちの研究室がある。

…私と川崎昇との間にきまった話は小樽の一番賑やかな町である花園町の公園通りという大通りに夜店を開き、高等商業学校の工場で作っている石鯨を仕入れて来て売ろう、ということであった。

国内製品では一二位を争ふ

高商石鯨の評判 その石鯨の出来上る工程

小樽緑町高臺の静寂を破つて異様の振動を立てゝ居るモーターの響きは高商企業実践科の附属石鯨工場其ものである。商工業聯絡提携の必要より企業実践科を設置し一般製造工業の経営、工場の管理法並に原価計算に関する研究を行はしむる為め石鯨を選び其工場を建設して以来茲に四ヶ年を閲した。失敗は成功の基で最初はいろいろの失敗を續けたが、今では押も押されぬ高商石鯨と言へば国内製品の一二位に迄漕ぎつける程である。…化粧石鯨は上等一打は二圓で頒賣するが一個は廿銭並品は一打一圓一個十銭洗濯石鯨は一個十銭である。

『小樽新聞 大正13年6月29日付』